



今日のキーワード 年内実用化が見込まれる新型コロナ『経口治療薬』

日本国内の新型コロナウイルスの新規感染状況は、8月中旬を直近のピークとして足元では落ち着きを見せています。これには、ワクチン接種の進展（日本での2回接種完了者の割合は全人口比で約66%、10月15日時点）が一つの背景となっています。一方で、次の感染拡大局面に備えるためにも、新型コロナウイルス向けの『経口治療薬』の実用化が期待されており、国内外の製薬会社の開発動向に注目が集まっています。

ポイント1 米製薬大手が新型コロナの『経口治療薬』の緊急使用許可を申請

- 今月に入り、米製薬大手のメルクは、新型コロナウイルスの『経口治療薬』として「モルヌピラビル」の緊急使用許可を米食品医薬品局（FDA）に申請しました。これに対してFDAは、同薬の緊急使用許可を審議する第三者委員会を11月30日に開くと発表しました。メルクの申請が認められれば、世界で初めての新型コロナウイルス向けに開発された『経口治療薬』となる見込みです。

ポイント2 自宅での服用が可能、医療機関の負担軽減に期待

- 「モルヌピラビル」は、メルクと米バイオ製薬のリジバック・バイオセラピューティクスが共同で開発したもので、ウイルスの増殖を抑える効果があると見込まれています。臨床試験では、重症化リスクのある軽～中程度の症状の新型コロナ患者において、入院や死亡のリスクを約50%低減する効果が確認されています。
- 『経口治療薬』は、自宅で服用できることが大きなメリットです。また、抗体カクテル療法が入院や死亡のリスクを70～80%程度低減すると見られることに比べて、その効果は低くなるものの、医療機関の負担を軽減できると期待されています。



今後の展開 『経口治療薬』のシェアを握るのはどこか？ 開発競争の行方に注目

- 米国では、FDAの第三者委員会を経て、早ければ12月にも実際に処方が始まると見られます。またメルクは、日本国内でも今春から臨床試験を行っており、日本でも申請されれば、審査を経て年内に承認される見通しです。とりわけ、岸田首相は『経口治療薬』の年内実用化を目指すとして述べており、その進展が期待されます。
- 『経口治療薬』は、メルクのほか、米国のファイザーや、スイスのロシュ、日本では塩野義製薬も開発を進めています。塩野義製薬は9月末の記者会見で、年内の承認申請を目指すとして表明しており、臨床試験が進められています。ワクチン開発の際と同様、『経口治療薬』の開発においても、先行して開発・実用化が進むと、その後の普及においても先行的にシェアを握ると見られ、開発競争の行方に注目です。

※個別銘柄に言及していますが、当該銘柄を推奨するものではありません。

ここも
チェック！

2021年8月27日 国内初の新薬承認で期待される『ウイルス療法』

2021年8月 5日 デルタ型急拡大の中、期待される『抗体カクテル療法』

■当資料は、情報提供を目的として、三井住友DSアセットマネジメントが作成したものです。特定の投資信託、生命保険、株式、債券等の売買を推奨・勧誘するものではありません。■当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。■当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。■当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。■当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。■当資料に掲載されている写真がある場合、写真はイメージであり、本文とは関係ない場合があります。